

筋電図による股関節、骨盤周囲の研究から臨床を考える

一端座位、立位姿勢での一側下肢挙上動作について

医療法人和松会 六地藏総合病院 リハビリテーション科

木田知宏、伊藤 陸、藤本将志、大沼俊博

運動器疾患患者や中枢神経疾患患者において、端座位姿勢や立位姿勢がある程度保持できたとしても、そこから一側下肢を挙上する動作の際、股関節や骨盤周囲の不安定性により活動が制限されることがある。

①「端座位姿勢で一側下肢を挙上する動作」は、靴下や下衣の着脱動作、座位から臥位になる動作、座位での浴槽の跨ぎ動作などで必要となる。

②「立位姿勢で一側下肢を挙上する動作」は、段差の昇段動作、立位での跨ぎ動作などで必要となる。

臨床において①②の動作は共に、支持基底面が狭小化することで不安定になりやすいが、股関節および骨盤周囲のハンドリングをおこなうことで、動作が安定することをしばしば経験する。

今回、上記動作における股関節および骨盤周囲の筋電図研究や画像を提示し、得られた研究データを基に臨床での評価と治療のポイントについて、皆様と共有する場にしたいと考える。